

宗教的情操の内容及び基礎

宇野圓空

宗教の本質は唯だ一般的心理現象の一形態に過ぎないか、或は何等か超人間的超個人的要素を基礎とするものであるか。之を單純なる心理現象であるとしても、其中心的要素は觀念の方面に在るか或は情意の方面に在るか。將又吾人の心理には特殊の宗教的感情若くば本能と稱すべきものが有りや否や等の問題は、宗教研究の根本問題として可なり以前から論議されて居るに拘らず、今に尙其徹底的解決を得ないかの觀がある。從て現在宗教を論ぜんとする者は常に何等かの意味に於て此問題に接觸せざるを得ないのであるが、これに就て宗教は一の先天的本能でないと同時に、又人が其周圍境遇に對する偶發的反應の一形式でもなく

其先天的傾向を基礎とし、或る觀念的要素を中心として組織された情操の經驗に外ならないと云ふのは、近頃ライトの公けにした『宗教に於ける本能と情操』と題する論文（William K. Wright, *Instinct and Sentiment in Religion*. Philosophical Review, no. 145 1916 Jan. pp. 38-44）の主張する所である。それで私は之を最近此種の問題に對する一の穩和な意見として、其要點を一瞥したのであるが、氏の考へは宗教は人間の一般的な先天的傾向若くは慾求が基礎となつて、或る對象及び價値の觀念を中心とする所の一の感情的經驗である、從て宗教の發達並びに特質は此等の要素の變化消長に就て之を見なければならぬと云ふに在る。

最初にライトは宗教が其自身一の本能の活動であるといふ考へに反對して、之を一の情操であると斷定してゐる。曰く、宗教は或る意味に於て之を本能と云ひ得ないものでもないが、然しマクドールガルの所謂本能即ち非特殊的情緒傾向 (McDougal, Introduction to Social Psychology) 若くはシャンドの所謂情緒 (Shand, Foundations of Character) 例令へば恐怖、抑遜、愛憐、生殖、飢餓、遊戯の本能と同様な意味に於て之を本能といふことは出来ない。むしろ其れはマクドールガル、シャンド、スタウト、エスターマートク等の云ふ如き普通の意味に於ての情操である。即ち宗教的情緒、行動は甚だ複雑多様なものであつて、宗教的經驗にのみ常に存在して其他に決して見られない様な、或る本能的な宗教特有の行爲や情緒は之を認めることが出来ない。藝術、道德、科學等の普遍的性質を定義することの困難よりも、宗教の普遍的

的根本的特質を明かにすることは更に一層困難であるが、然し若し人は常に一の無限なるものゝ意識を有して、超越的實在と關係せんとして居り、宇宙には自己以上の己れを助ける力が存在するといふ感情に依つて其道德を維持して居るといふことが出来るならば、之れこそ上下一切の宗教に共通する宗教の最も普遍的な特質と見て差支あるまい。そこでかゝる意味に於ける宗教には眞、善、美等の如き特殊な宗教的價値を認めることも出来ず、又普通云ふ如き特殊の宗教的本能なるものをも認め得ないのである。

著者の此簡單なる論旨が果して宗教的特殊的本能の存在を否定するに足るや否やは頗る疑問であつて、其假設的ではあるが宗教の定義として提示する所のものも、猶舊い觀念に囚はれた獨斷の嫌を免れないのである。然しこゝで著者は戟を轉じて更らに社會的人爲的宗教觀を攻撃して居る。即

ち宗教が先天的生得的の本能の活動ではないといふ點から、近頃は宗教的活動及び信念の内容は個人がその境遇から得る所の社會的產物であつて、廻心、恍惚、幻視等の宗教特有の現象も、本來模倣や暗示によつて普通の感覺を通じて入つた潜在意識や若くは神經作用の効果が現はれたものに過ぎないと云はれる。如何にも各宗教には夫れ々々特有の儀式があり、其れが情緒の興奮と相俟つて民族的傳説や信念を個人特に青年に賦與するこゝとは事實であるが、然し之れが個人に取つて全く無意識的受動的に行はれるとは斷言出来ない。かかる場合に其個人が社會的強制を感じ、社會の傳説を其信念の内容として攝取し、社會的の儀式に範を取つて行ふことは勿論であるが、かかる宗教的經驗は其社會的境遇に制限されると同時に、又其人自身の先天的衝動の根底から勃發するのであつて、この根底が無ければ其經驗は其人に取つて

生命あるものとは成らないのである。即ちかかる經驗は個人が社會的秩序の内容を唯受動的に受け入れると云ふよりは、むしろ其人自身の宗教的慾求に對する反應である。故に宗教的態度は其自身一の先天的本能ではないと同時に、又單に外的境遇により個人の上に生じた習性でもなく、先天的衝動がその社會的境遇に反應して生ずる所の一の情操である。ライトの議論は近時動もすれば外部的に偏せんとする宗教の説明に對して、其內的起源を稍、科學的に主張せんとしたものと云ひ得るので、其宗教社會學派に對する駁論としては尙十分徹底しない様であるけれども、宗教心理學派としての立場は明瞭に現はれて居るといつて宜い。次に宗教的情操其物の説明に於て著者はマクトーガルを引いて居る。マクトーガルに依ると情操とは或る事物の觀念を中心として、そこに集中した情緒的經驗の組織であつて、其組織たるや遺傳

的、先天的に固定したものでなく、經驗を積む中に精神に發生する所の組織である。勿論シャンドは情操をば更に先天的生得的のものと見て居るが、情操は外的刺戟に對する意識的無意識的の反射や反應の結合した習性ではなく、又單に生れた儘の本能でもなく、此本能の外的境遇に對する反應であつて、本能よりも更に發達せる一層複雑な組織であるといふのが、ライトの見方である。而して宗教的態度がかゝる意味の情操の一種であることを明かにする爲めに、ライトは之を他の情操特に愛の情操と比較して居る。愛は單純なる本能や情緒ではなく、喜悅、悲哀、希望、恐怖其他種々の本能や情緒が結合して愛の對象に向つて感ずる所の極めて複雑なる情操であるが、宗教的情操も亦同様に人間として感ずる諸有情緒を其中に含んで居る。而して宗教的情操と愛とは其發生の上に漸進的、突發的、自發的、他發的等を區別し得る點も甚しく相似て居るが、其内容の組織も兩者の間に著しい類似がある。愛は愛憐の情緒と、特に異性の愛に於ては性慾本能とが根底となつて、周圍の狀況に依つて之れに種々の異つた本能や情緒が加はり、而も其等が或る對象の觀念を中心として集つた一の組織であつて、其對象たるや動物、兒童、處女、祖國、正義、自由、學問、其他人格的のもの、非人格的のもの、抽象的のもの等場合に依つて種々雑多であるが、宗教的情操も亦其中心として一の對象の觀念を有し、其對象はまた實に多趣多様である。此外愛が其個人的氣質、性格と其對象の性質に應じて、其内容と表現を異にする點も全く宗教的情操と異ならない。而して宗教的情緒としては、マクドールガルに依ると憧憬、崇畏、尊敬等の結合したものが最も根本的であるが、此中には自ら恐怖、驚異、感謝、抑遜等の情緒も含まれてゐる。又ロバートソン、スミスの如きは反對に愛を

以て宗教の根本的要素とするのであるが、オーストリア等に於ける最も原始的な宗教に於ても、其基礎的情緒としては恐怖があり愛があり、攻撃の本能、營養の本能等は最も著しく現はれて居り、其他の高等な宗教に至つては、之等凡ての本能や情緒が一として認められないものは無いと云つて好いのである。而して之等の中で其執れが根柢となり、又其が如何に精練されて現はれるかは、一に其天然的社會的境遇と文明發達の程度の如何に歸着するものである。

かくしてライトが宗教的情操の內容性質の多様であることを認め、之を愛の情操と比較した點は甚だ其眞を得て居るのであつて、動もすれば其一方を捉へて凡ての宗教を説明せんとする従來の學說に比して大に客觀的批判の歩を進めたものと云はなければならぬ。然し其所謂情操が其根柢に於て人類の先天的傾向、慾求に基くものとしても、

情操は情操であつて、若しこれが直に宗教其物であると云ふならば、要するに宗教は一の精神的活動としての感情的经验を出でない。従て所謂宗教感情論者の被つた非難は依然として避けることは出来ないのである。即ち若しかゝる感情的经验が其自身宗教であるならば、多くの宗教の事實として存する所の儀式、制度其他の外的行動は、唯この感情の表出運動若くはかゝる經驗を促進すべき手段としてのみ其意義を有するものであつて、宗教としては其本質から遠い從屬的な要素に過ぎないものとなり、且つ宗教的行動の大部分を占めて居る宗教的價値を目的とする意志的行動の如きは全然無意義の妄動と見なければならぬこととなる。此點は宗教社會學說や、同じく宗教心理學說の中でもリューバ等の意志的實際的宗教觀の方が宗教上の事項を説明するに容易なるものがあるの

で、宗教の主觀的見解特に感情的見解に立脚する

人々に對して更に何等かの説明が要求される所以である。

さて次にライトは宗教的情操の中心としての對象の觀念の多様であることを述べ、對象の觀念は其情操の根源又は歸着點として極めて重要な意義を有すること、又それは特に宗教的經驗に入つた人の努力發奮の源泉として、科學的説明に於ける外、一般信者には一の客觀的存在として考へられ、宗教的意識に於て一の獨立の要素であることを説明して、更に此宗教的對象の觀念と共に依て人が求むる所の價値の觀念と區別すべきことを主張するのである。例へばツォイスは正義を保護するが正義は必ずしもツォイスの神格の中心ではない。又ヘラは貞操を守護する女神であるけれども、彼女は本來貞操の人格化されたものではない、故に宗教的對象と宗教的價値とは、未だ其觀念の明かに分化してゐないトテミズム等の原形的宗

教と、更に二者の觀念を綜合し盡した哲學的汎神論との兩極端を除いては、一般に獨立のものとして相差別して現はれて居る。而して此兩者の區別は宗教其自身の特性であつて、之を道德や藝術的態度と區分すべき最も重要な點である。即ち神が道德を守り宗教的儀式が道德を促進することはあるが、これが直ちに道德ではない。道德と宗教とを混同する人々が動もすれば道に契へば神や祈禱の要なしとするは、此價値と對象との區別を解しないに基くのである。又藝術的享樂に於ては對象と價値とは一體になつて居り、従てそれは無關心となるのであるが、宗教的意識はそれが神の讚仰や神秘的靜觀等の一の藝術的形式を取る時に限つて兩者の區別を没却するけれども、それは多く一時的であつて、一般的には其對象と慾望とが明かに分化されて居る。

然しながらライトの云ふ對象と價値との區別は

必ずしも凡ての宗教に普遍的な事實ではない。彼自身も云つた様にトテミズムや其他の原始宗教に於ては、食欲の目的たる動植物が直に神であり、其恐怖の目的である天然現象や精靈の觀念が其宗教的對象であつたことは勿論、強ち神秘家の宗教的經驗でなくとも、神佛との合一を唯一の目的價值とし、其以外に別に慾望を有しない場合は屢々ある。又一方道徳や藝術(單なる美意識として)に於ても或る程度まで所謂對象と價值との區別、即ち其手段と目的價值との區別は存するのであつて、之に關する宗教と道徳又は藝術との間の別は畢竟程度の差に過ぎない。詳言すれば所謂對象は其慾望の目的たる價值の手段として其自身亦一の價值であつて、其目的に對して手段の觀念が別に現はれた時は其は所謂對象として目的たる價值と對立するが、手段觀念がなければ其當初の慾望の目的か即ち對象に外ならないのである。故に

宗教に於ても藝術等に於ても時によつて此二者は合一することもあれば、分離して存在することもあるので、對象と價值の區別の有無は決して宗教と藝術等の根本的差別とはならないのである。若し夫れ宗教を藝術等から區別するには、一方宗教が其價值を得るに特殊の方法を有すること、他方に於て藝術の價值が宗教の如く一般的でなく、或る一方に制限された特殊の價值であることを明かにしなければならぬであらう。

然し唯宗教其物の中に單なる概念上の區別として、一般に宗教的態度の對象としての存在の觀念と、慾望の目的としての價值の觀念とを一往區別することは、不合理でないのみならずむしろ必要である。即ち著者は宗教の發達を見る上に此區別を利用して宗教の發達には(一)對象の發達、(二)其對象に依つて求むる價值の發達、(三)對象と價值との關係並びに先天的本能情緒の組織及び影響に基く

情操其物の發達の三方面がありとするのである。

此中對象の發達は即ち一般に宗教の發達として論ぜられて居るのであつて、マレットやキングの云ふが如く *Heaven* 等の非人格的神秘的力の觀念より始めて、多神教より單一神教、惟一神教等と進む

ことを云ふのであるが、之れと相並んで價値の發達とは食物、勝利、長壽、子孫繁榮等の物質的慾望が、漸次に勇氣、智識、滅罪、解脱等の精神的價値に進むことである。同様に宗教的情操其物も其對象や價値の發達すると相應じて進歩するのであるが、全體として宗教的情操の發達には、(一)情操の内容が漠然として價値と對象の觀念が明瞭に分化せず、道德的價値が其中に含まれて居ないもの、假令ばオーストリアの宗教の如き漠然たる *Heaven* の觀念があるのみで、其對象に確たる名稱も無い時期、(二)情操の内容が分化し、同時に個體化されて、種々なる兇物、精靈、神等に對し夫

々特有の宗教的情操が併存せる状態、(三)種々の對象の觀念が、體に綜合された所謂一神教の時代との三段階がある。而して此三段階は現今の兒童の宗教が青年期の宗教と發達する過程にも之を認めることが出來ると云ふのである。

上に云つた如く所謂對象と價値との區別が宗教の特性でもなく、又其發達を示す所以でもないとするれば、この所謂宗教的發達の三段階の如きも尙大に修正の餘地を存すること勿論であるが、然し宗教の發達を見るに其對象の觀念と價値即ち慾望の目的觀念と及び之等の上に働く情操の特質との三方面から觀察することは、大に其當を得たものがあつて、從來單に其對象觀念の變化發達のみを見て、宗教其物の發達であるかの如くに考へた學者に對して、痛切なる警策を加ふるものと云はなければならぬ。尙終りに著者は宗教的情操の内容の發達に道德的分子の必要なることを論じ、宗教

の排他的性質の貴ぶべきこと、其保守的傾向の意義等を論じて居るが、今の問題に直接重大の關係を持たないから省略に従ふこととする。

因に茲に單評を試みたライトの論文は哲學雜誌四月號に小尾文學士が詳細に之を紹介されて居る。而して私が此稿を草したのは、該紹介が公けにされてから間もなくであつたが、時恰も母の喪に會し、抱忙の間之を見るの機會を得なかつたのである。後に至つて本編が哲學雜誌上のそれと稍重複の嫌あることを發見したけれども、既に印刷成つた後であるから、暫く之を存して讀者を煩はすことにした。敢て他意あるのではない。(校正に際して筆者付記)